

図書館だより



2019年
5月号

2019年5月8日発行

平成が終わり、令和の時代が始まりました。時代の節目にみなさんは何を感じ、どんな思いを持って令和を迎えたでしょうか。新しい時代が平成以上に平和で、人々が幸せに暮らせる時代となつてほしいですね。

さて、新元号「令和」は日本最古の歌集「万葉集」の「梅花(うめのはな)の歌三十二首」の序にある「初春の令月(れいげつ)にして、気淑(よ)く風和(な)ぎ、梅は鏡前の粉を披(ひら)き、蘭は珮後(はいご)の香を薫す」から引用されたと発表されました。日本の古典に由来する元号は初めてであり、これにより万葉集が注目を浴びています。万葉集という名は知っていても国語の授業で内容に触れたくらいという人も多いかと思いますが、これを良い機会と受け取って、万葉集をもっと知ってみませんか。図書館の「平成から令和へ」コーナーでは万葉集や元号に関する本を展示していますので、手に取ってみてください。



まずは万葉集に親しんでみよう

911.1-マ『よみたい万葉集』 村田 右富美 || 監修 西日本出版社

万葉集は、約4500首、全20巻からなる歌集です。何もわからないまま手に取ってもどう楽しんでよいのか戸惑ってしまいますよね。まずは万葉集の基本を知ってみましょう。雰囲気のあるイラストつきで万葉集の中から歌をテーマごとに分けて解説してくれています。当時のファッションやしきたり、歌に詠まれる動物や植物についてなど、色々なことを豆知識としてまとめてくれているので、より歌の世界に浸ることができます。声に出して詠むことで、音の響きやリズムのおもしろさを感じたり、自分の思いにシンクロする歌を見つけたりして楽しんで読んでみてください。

日本史の中には、こんなにたくさんの元号があった

B210-グ『元号でたどる日本史』 グループSKIT || 編著 PHP研究所

日本で最初の元号は「大化」とされています。「645年 大化の改新」と日本史でも覚えたあの「大化」から「平成」までの約1,400年の間に誕生した年号が一挙に載っています。元号の出典先やその時代に起きた出来事についても書かれているので、日本史で学んだ知識を思い出しながら「そうか、あの時代にはこんな元号がついていたのだな」と学ぶことができます。令和の元号も様々な予想がされていて、色々な言葉を目にしたと思いますが、実際に使われてきた元号を追いながら、縁起のよさそうな元号、音の響きが良い元号、文字のバランスが良い元号など見つけてみてください。

🏆 2019年本屋大賞は瀬尾まいこさん 🏆

先月発表された2019年本屋大賞には、瀬尾まいこさんの『そして、パトンは渡された』が選ばれました。初めて本屋大賞に作品がノミネートされ、そして大賞を受賞するという快挙でした。瀬尾さんの作品には家族の絆や、人と人との思いがけない出会いなどを、温かく描いたものが多く、読者の心を癒してくれます。

913.6-セ『そして、パトンは渡された』 瀬尾 まいこ || 著 文藝春秋

父親が3人、母親が2人、家族の形態は17年間で7回も変わった。それでも、森宮優子は「困った。全然不幸ではないのだ」と言う。他の人とは違った家庭環境にあるけれど、ちっとも寂しい思いをしていない。名字が変わっても、暮らす顔ぶれが変わっても、血の繋がりがあってもなくても、いつでも森宮優子には彼女を愛してくれる家族がいた。愛の形は、人それぞれ。そっと見守る愛もあれば、破天荒に見える愛もある。たくさんの愛に包まれ、成長していく少女の様子に始終心が温まります。最初の1ページはラストに繋がる大切な場面です。最後に、もう一度読み返すと味わいが増します。

913.6-セ『僕らのごはんは明日で待ってる』 瀬尾 まいこ || 著 幻冬舎

兄を亡くした喪失感を抱えて、窓の外を見てたそがれてばかりいた高校生の葉山くん。いつものとおり、葉山くんがたそがれている内に決まってしまった体育祭の出場種目は、米袋ジャンプだった。感傷にふけていても、米袋の中に入ってジャンプしないとイケない。しかし、何をやる気力も湧かず、人との接し方も忘れてしまった葉山くんの人生を米袋ジャンプが変えてくれる。それは共に米袋の中で飛んだクラスメイトの存在があったからだ。ぎこちなく始まったふたりの交流は、どこかちよつと風変わりであるけれど、まっすぐで温かくて、「ふたりに幸あれ！」と応援したくなります。

🌳 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 🌳

3月にオープンした飯能のムーミンバレーパークですが、もう遊びに行った人も多くいるのではないのでしょうか？この連休中も相当混んでいたようです。その入り口には、ムーミンの物語が書かれた4つの“本”のゲートがあります。くぐりぬけたその先は、ムーミンとロールたちの物語世界です。ムーミンの物語のはじまりは本。本を読んでおけばきっとより一層楽しめるはずとヤンソン著『小さなロールと大きな洪水』他(B949.8-ヤ 講談社)を読みました。子どもの頃アニメを見ていたので、ムーミンのことなら割合知っているつもりだったのですが、ムーミンの大きさを勘違いしていたことにはショックを受けました。そういえば、アニメをやっていたのも昔のことです。皆さんにも馴染みがないかもしれません。そうか！今度の映写会で一緒に見れば、パークへ行く予習になりますね。詳しいことは後日ポスターでお知らせしますが、**5月23日(木) [中間テストの最終日の次の日] 放課後の映写会**を、ぜひ予定にいられてみてください。【鈴木】

★先生がプロデュース!! 今月の展示★

今月の展示は…、国語科 鈴木信滉 先生がプロデュースです😊

展示のテーマは…、【 出 逢 い 】です。

人は一人では生きて行けず、必ず誰かの支えがあって今があります。学校に通いクラスに所属するみなさんにとって、人間関係の構築は避けては通れないものです。中には人見知りで自分から声をかけるのが苦手だという人もいるかもしれません。しかし、自ら行動することで世界が広がるということも事実です。さて、皆さんには「友達」と呼べる人がどのくらいいますか？人との出逢いを通して主人公が成長していく物語をみなさんにご紹介しましょう。

◆展示本リスト◆

- 913.9-タ 『トラペジウム』 高山 一実 || 著 KADOKAWA
→「絶対にアイドルになりたい」という東ゆうの夢が4人の少女を出会わせることになる。
- 913.6-キ 『手紙屋 蛍雪篇～私の受験勉強を変えた十通の手紙～』 喜多川 泰 || 著 ディスカバー・トウェンティワン
→「何のために勉強をするのか」モヤモヤした和花の気持ちを「手紙屋」が解決へと導く。
- 913.6-ア 『桐島、部活やめるってよ』 朝井 リョウ || 著 集英社
→バレーボール部主将の桐島が部活を辞めたことをきっかけに、同級生たちの日常に変化が起る。
- 913.6-ム 『コンピニ人間』 村田 沙耶香 || 著 文藝春秋
→「普通」とは何か。コンピニを舞台に繰り広げられる36歳未婚女性古倉恵子の人間模様。
- B913.6-オ 『ホケツ』 小野寺 史宜 || 著 祥伝社
→一度も公式戦に出ずにサッカー部の引退を迎える宮島が、自分だけの人生のポジションを探す。

この中でも、いちおしなのは…



913.6-キ 『手紙屋 蛍雪篇 ～私の受験勉強を変えた十通の手紙～』
喜多川 泰 || 著 ディスカバー・トウェンティワン
「なぜ勉強しなくてはならないのか」「勉強の意欲が湧かない」そういった悩みを持っているあなたに読んでほしい。図書館では何回も「返却待ち」になる人気作。もし図書館になければ鈴木(信)までお声かけください。

本で振り返る平成の30年

今回は平成元年と、その翌年のベストセラー本から吉本ばななさん、シドニィ・シェルダンさんの作品を中心に紹介をしました。今回は平成3年から時代と本を振り返っていきましょう。

シドニィ・シェルダンさんの人気は単年に留まらず、平成3年、4年、5年、6年と連続して作品が年間ベストセラー(トーハン調べ)の10位以内に輝いています。また同時期には、さくらももこさんの作品が『もものかんづめ』(平成3年の3位)、『さるのこしかけ』(平成4年の2位)、『たいのおかしら』(平成5年の3位)と連続で上位に入っています。この3冊は、さくらももこさんのエッセイ3部作で、ユーモアを交えて語られるさくらさんの日常に、日本中が元気をもらいました。その後も、さくらももこさんの執筆するエッセイの多くがランキングにあがってきており、さくらももこさんの人気を窺い知ることができます。

また平成4年には、『国境の南、太陽の西』(村上春樹 || 著)が第9位に入っています。いまま新刊が出る度に話題となる村上春樹さんですが、この人気は平成初期から続いているのです。海外文学では、翌年の平成5年に『マディソン郡の橋』(ロバート・J・ウォラー || 著)が第2位となっています。4日間だけの恋が描かれたこの本は、「ニューヨーク・タイムズ」のベストセラーリストから3年以上外れなかったという大ベストセラー本です。日本の年間ベストセラーでも2年連続で10位以内(平成5年の2位、平成6年の3位)に入っています。

913.6-サ 『もものかんづめ』 さくら ももこ || 著 集英社

ちびまるこちゃんの作者としても有名なさくらももこさんの初エッセイ。出版当時、この本を読んで笑い転げた人も多かったことだと思いますが、今読んでもそのおもしろさは色褪せていません。家族の反対を押し切って買った睡眠学習枕の末路、目的のわからないホームルーム委員親睦会の思い出、謎を残す底なし銭湯など、さくらさん自身の体験がユーモラスに語られており、読む人の心をスッキリ晴れやかにしてくれます。とても読みやすいので普段あまり本を読まない人にも楽しんでもらえること間違いなしの1冊です。

933-ウ 『マディソン郡の橋』 ロバート・ジェームズ・ウォラー || 著 文藝春秋

撮影のためにアイオワ州マディソン郡を訪れた写真家のロバート・キンケイドは、道を探し、通りがかった家の前にいた農夫の妻に声をかけた。声をかけられたのはフランチェスカ・ジョンソン。彼女は玄関にあるブランコに座って、アイスティーを飲んでいるところだった。道を聞き、道を教え、それきりになるはずの一瞬の出会いが、彼にとっても、彼女にとっても生涯において何より大切なものとなる。惹かれまいとしながら、惹かれ合ってしまった二人の4日間の恋は、納得したり、できなかったり、感動したり、疑問を残したり、読む人それぞれの心に色々な感情を残すものであります。